

To bequeath a “clean room”: The world shown by Banana Yoshimoto’s “Midori no Yubi”

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

This paper focuses on Banana Yoshimoto’s short story “Midori no Yubi.”

This short story is not only important as a masterpiece written by Banana Yoshimoto, but because it deals with the relationship between human beings and nature, a theme that has been important to artists since the story was written. In previous studies, “Midori no Yubi” has been regarded as “a story of the protagonist’s growth [as] triggered by the death of her grandmother.” However, this understanding overlooks the story’s various expressive devices or contrivances. Therefore, this paper has attempted to reread and present “Midori no Yubi” as a text.

Chapter 1 presents the problematic concerns mentioned above after reviewing previous studies. The paper then analyzes the temporal structure of the text in Chapter 2 and decodes the relationship between the grandmother and the protagonist through the plants present in Chapter 3. In synthesizing these, Chapter 4, presents the point of life that the main character chooses, using the memory of the room left behind by her dying grandmother as a clue thereof.

「清潔な部屋」を遺すために

——吉本ばなな「みどりのゆび」が示す世界

松本和也

I 問題関心

昭和が終わろうとする頃、「キッチン」(『海燕』一九八七・一一)でデビューした吉本ばななは、その後、平成を代表する作家として独自のキャリアを積み重ねていった。⁽¹⁾二〇〇〇年には、短編集『不倫と南米』(幻冬舎、二〇〇〇)でドゥマゴ文学賞を受賞したほか、『吉本ばなな自選選集(全四巻)』(新潮社、二〇〇〇～二〇〇二)の刊行がはじまるなど、前後する時期が作家的な転機であったことは想像に難くないが、実際、本人にもそのような自覚があったことについては、次の新聞記事で紹介されている。

九九年の元日から、「一日一本、短編を書く」と誓い、スポーツのように厳しい鍛錬をつんだのだ。

本人は「三十五歳は迷いの多い年齢。この迷いをどう解決するかと考え、この方法しかないと思った」と

分析してみせる。私小説的な方向で芸術度を高めるか、技術を磨くのか。「今のままなら、もう書けない」ほどに思いつめた結果だ。

同記事は、「修練の成果がはつきり現れたのが最新短編集『体は全部知っている』⁽²⁾とつづく。しかも、短編集『体は全部知っている』(文藝春秋、二〇〇〇)⁽³⁾には、もう一つ、作家としての新たな挑戦が関わっていた。

これも新聞記事を参照しておけば、「(吉本ばななは)若い女性層を中心に海外でも人気が高い人だが、昨年は、中高年向きの月刊誌に初めて短編を発表、『体は全部知っている』(文芸春秋)にまとめ、年配層にも支持が広がった⁽⁴⁾」と評された。補足すると、後に『体は全部知っている』に収められることになる「三つの短篇——「ボート」「田所さん」「おやじの味」」(『文芸春秋』二〇〇〇・二)は、その初出媒体・読者層においてはじめての挑戦だったのだ。そのことについて、吉本本人も次のように振り返っている。

最初の発表場所が「文藝春秋」だったことの意味は大きいですね。つまり、これまでの自分の読者以外の人に向けてどのように書いたらいいか、ということを考えさせられたんです。⁽⁵⁾

まとめれば、小説家として短編の技術向上と新たな読者層開拓という挑戦の帰結が、短編集『体は全部知っている』なのだ。この短編集のテーマはタイトルに掲げられた通りだが、短編群に徹底する創作の動機は、インタビュー記事に作家の発言が確認できる。「この本には十三の短篇が収められていますが、それぞれ読後の印象は

まったく違いながら、全体としては見事な統一感があります。「あらかじめ一冊にまとめられることを想定して書かれたのですか」というインタビューアーの問いかけに、吉本は次のように応じている。

「体は全部知っている」というテーマで短篇をたくさん書こうという気持ちは最初からありました。それはつまり、体の方が頭や心よりも敏感で、不調などを早く知らせてくれるということ。それは精神の不調も含めてそうです。あと、記憶というものは身体感覚に近いものだということ。大体そういうことですね。⁽⁶⁾

こうした短編集のエッセンスを集約した収録作（の一つ）が、本稿で検討対象とする「みどりのゆび」である。同作は短編集の冒頭に置かれたこと、この後に吉本が書きついでいく「王国」シリーズ⁽⁷⁾へとつながっていくこと、それも含めて人と自然の深い関わりを書いたことなど⁽⁸⁾において、重要な短編だといえる。

吉本ばなな「みどりのゆび」は、『体は全部知っている』（文藝春秋、二〇〇〇）に書き下ろされた、単行本で一三ページの短編である。「みどりのゆび」に章わけはないが、一行あきによって全体が六パートに分節されているため、本稿ではそれを基準に〈1〉〜〈6〉と表記し、さらに〈1〉は時間軸でa／bに分節する。

まずは、「みどりのゆび」のあらすじをまとめておく。

冬のある日、主人公兼語り手の「私」は、電車から「慌てて降り」て宿へと向かう。山の坂道を登って行く途中で「誰かの気配」を感じる（1a）。「去年の冬」に時間軸が移り、ある夕方、玄関脇に植えたアロエが近所迷惑になることを案じた父が、処分してよいかと「私と妹」に問う。二人が空返事をしているうちに帰宅した母

によって、祖母が「末期の子宮癌」だと告げられ、アロエのことはうやむやになる（1b）。家族は祖母のお見舞いに行くようになり、「私」は病院に「行ったり来たりしている」うちに、生死を「同じ」だと感じるようになっていく。この間、「私」は毎日「植物が好きで祖母の大切な鉢植えたち」の水やりをしに行きつつ、祖母の死を受けいれようとしていく（2）。ある午後、「私」は祖母に「植物の仕事が合ってる」と勧められる。「苦手」だったシクラメンが「少し違って見えてきた」という祖母は、その生命力を感じとり「友達」になったのだという（3）。ある夕方、ほとんど意識がない祖母から、「私」は自宅のアロエを切らないように頼まれる。祖母の部屋に行き「植物たち」への水やりをしているうちに、「私」は「祖母のささやかな人生」、そして「植物たち」の生命力を感じとる。帰宅後、「私」はアロエを「庭の昼間陽当たりがいいところ」に植え替え、その月明かりに照らされた姿に「はげまされる思い」がする（4）。祖母の死後、「私」は花屋への転職を決意し、勉強をはじめめる。その支えとなったのは、「祖母の最後の言葉」であり「あの夜の祖母の部屋」であった（5）。冒頭の時間軸に戻り、「何かの気配」を感じた「私」は、「ジャングルのように茂っているアロエ」を目にする。陽を受けたアロエは「生きている喜びを伝えようとして」おり、「私」は植物との「つながり」を自覚し、祖母から「みどりのゆび」を受けついでことに気づき、山道を登っていく（6）。

以下、吉本ばなな「みどりのゆび」についての先行研究を検討しておく。

単行本刊行時の書評は、「みどりのゆび」一作ではなく短編集への論及が多い。「この作品集を読み解く鍵は、まさしく表題が示唆している」という光野桃は、「良識とか既成概念とか慣習といったものにまみれた頭を取り外し、体そのものでこの小説世界とシンクロすること」、「性別も年齢もなく、ただ一個の生き物に立ち返るこ

と」を、本書で作者が示した「新しい道筋」だと指摘した⁽⁹⁾。また、光野には次の論及もある。

生と死の円環を、家族や恋人たちを通して描いてきた著者が至った、すべての生き物は死ぬまで生き抜くのだという真理の清冽さ。精神の実用ともいえる言葉の小石を、この世に静かに置き続けることこそ、いま最後に残された小説の役割なのではないか、と気づかされる思いがした。⁽¹⁰⁾

長蘭安浩も「一貫して、表題に象徴される「身体性のありがたみ」らしき主題が流れている」と指摘したように、「体は全部知っている」に書かれた、身体に即した生物としての生／死がはやくから評価されていた。

その後は、「みどりのゆび」が高等学校国語教科書に採用されたことで教材研究が進んだ。嚆矢となったのは「みどりのゆび」を「喪失と獲得の物語、生と死をめぐる物語」と要約した安田正典である。祖母の死という出来事を契機として「〈植物の声を聞く人〉」となった「私」の「変貌」を、「家族のテーブル」といういわば哺乳類的ぬくもりの世界（生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所）から、植物と人とが異種交感するコズミックな世界へと抜け出してゆく過程」と捉える安田は、「おそらく「私」の生は、「ただ日を求め、水を求め、愛を求めて生きているだけの美しい生物たち」の生によって浄化される」のだと論じた。やはり主人公「私」のたどる出来事を軸に「みどりのゆび」を読んだ神田富士男は、その過程を「危機を乗り越え、植物と交感し、人々と交感できる喜びによって「私」は自分自身を救済した」と要約し、読者の読後感についても「森の中で深呼吸したようなすがすがしい感じがして、なんだか癒された気分になるだろう」と推測した。また、右の指摘と「祖母の

生き方を知った「私」が、希薄な関係の生き方をやめ、心の奥底で通じ合える関係の生き方に変えていく様子が描かれたことをもって、神田は「現代社会に蔓延している均一化の風潮を痛烈に批判し、それに流される生き方を変えること」という「批評性」を「みどりのゆび」からとりだしている。⁽¹⁵⁾「みどりのゆび」読解のポイントを「私」に絞りこんだ青嶋康文は、同作を次のように論評している。

一年前の冬には無自覚であったが、祖母の死という衝撃を契機として、私は祖母から引き継いだ才能があることを自覚する。祖母は亡くなったが、心の中で生き続ける。生死の境目を越えて祖母は再生する。このように新たな私を獲得する物語に読者は癒しを感じる。⁽¹⁶⁾

ここでも神田同様、「私」が一連の出来事を体験することが読者に「癒し」をもたらすと想定されているが、より重要なのは、「語られている私を対象化しようとする語る側の私がある」という指摘だろう。もちぎきみつこは、祖母からのメッセージを聞いた「私」がとった行動に注目し、「みどりのゆび」を「祖母との関係を大事に考え、祖母に導かれた方向に生きる道を転換し、生きがいを見出した「私」の物語」だと捉えた。各社の教科書指導書を検討した佐々木義登は、「全社とも祖母の死を通して「私」の心理状態がどう変化していったかに注目し、「私」が作品結末部分で至った境地がどのようなものであるかを考えるという点にポイントが置かれている」と整理している。⁽¹⁹⁾その上で、「読者に社会規範の相対化を促し、読者の「わたしのなかの他者」を激しく揺さぶる」のが「語り手」の営為⁽²⁰⁾だと指摘する佐々木は、物語内容よりも語り手の役割を重視している。井

上明芳は「過去を言葉に拠って整序するその仕方こそが過去の再現となるのだから、語り方は〈過去〉の再構成であり、再構成された〈過去〉を現在「私」は経験する」として、「みどりのゆび」の一人称回想体という形式に注目し、「私」が「みどりのゆび」を持つ確証に至ったのは、現在を言葉にすることによって意味を得るから⁽²⁾だと、(語られる過去の「私」の体験を)現在の「私」が語ることの意義を強調した。作家論的視座からは、長谷川弘基が「みどりのゆび」に偏在する時間操作⁽³⁾を指摘しつつ、「ナラティブにとって最も「自然」な時間的連鎖が分断され、登場人物を特定する情報にも欠落があり、小説世界の「安定性」を意図的に否定することによって、YB(吉本ばなな)に特有の「歪み」が作られる⁽²⁾」と、その特徴を論じた。

こうして「みどりのゆび」先行研究を見渡してみるならば、一人称回想体という形式をふまえ、祖母と植物(アロエ)と「私」の関わりを軸とした物語内容が、祖母に影響をうけた「私」の、理屈よりは感覚・身体を通じた変化(成長)を主線として、論者それぞれのアクセントから意味づけられてきた、と概括できる。オプシヨンとしては、「みどりのゆび」から読者への癒やし効果や現代社会への批評性が、論者それぞれの飛躍を孕んだ解釈に即して示されてきた。ただし、こうした「私」―物語内容を軸とした理解からはテキストの工夫や仕掛け⁽³⁾がもれおちてしまう。先行研究の「みどりのゆび」理解は必ずしも誤りとはいえないが、主要登場人物とその言動、出来事が偏重される反面、テキストとしての側面が看過されてきた嫌いは否めない。

そこで本稿では、先行研究の成果を批判的に引きつぎつつ、改めて「みどりのゆび」をテキストとして捉え直してその表徴を分析的に読解することで、何がどのように書かれていたのかを考察していきたい(それは裏を返せば、テキストに書かれていないことを読者が勝手に読むことは差し控える、ということでもある)。

Ⅱ テクストの構造／語り手「私」の戦略

本節では、「みどりのゆび」というテキストの基盤を成す四つの特徴について検討していく。

第一に、「みどりのゆび」の構造について、時間軸を基準に分析・整理しておく。「みどりのゆび」は、主語が明示されない「電車の中でうとうととしていたので、半分夢を見ているような感じだった」という一文からはじまる。そのことによって、「私」の今の感覚・状態が、臨場感をともないながら提示される。小さな宿を目指して電車とタクシーを乗りついで「私」は、「まわりは畑ばかりで、遠くになだらかな山が見え」るところで、「宿を示す小さな看板を見つけ」、「その指示にしたがって、細い坂道を登って行く」。

寒さにも慣れてきて、きれいな空気を嬉しく思った。次第に目が覚めてきて、うっすらと汗すらかいていたその時、私は前方に知っている誰かの気配を感じた。(九頁)

ここで覚醒しつつある「私」が感じた「誰かの気配」²⁴が、「私」に一年前の出来事を回想させていく。時間軸の移動をもたらす契機となったのは、アロエ（の記憶）である。そのことは、〈1a〉に書かれた右の場面との明示的な重なり（旅、山、冬、「誰か／何かの気配」）をもつ、次に引く〈6〉冒頭部に明らかである。

たまの休日、だんなが熱をだして妹が来られなくなったのでひとり旅をすることにした私は、そう、その山の中で何かの気配を感じた。祖母が死んで初めての冬だったが、もう何年も前のことのように遠く思えた。(二〇頁)

「私」の不確かな時間感覚も〈1a〉と〈6〉の「私」に共通しており、さらに、こうした場面の重なりを決定的にするのが、右の引用箇所につづいて「私」の視界に入るアロエである。「西日に激しく照らされ」た「私」は、「なんとなく優しいまなざしで、どこか熱くて、懐かしいものにそっと包まれているような感じ」を抱いているが、テキストは次のようにつづく。

もしかして祖母の幽霊が見えるのではないかと期待した。幽霊でもいいから会いたかったのだ。しかし、私の目に映ったのは、小さな民家の庭にたくさん、ぞっとするほどたくさん、ジャングルのように茂っているアロエだった。(二〇頁)

すでに、「私」にこのような経験があったため、〈6〉の光景「感覚を語る前に」〈1a〉につづいて〈1b〉でアロエに関する記憶である「去年の冬」の出来事(祖母の入院・死)が回想されていくことになるのだ。〈1b〉から〈5〉までのテキストは、省略やさらなる回想を挟みながらも、大枠としては時系列に即して進んでいく。これらを整理すると、「みどりのゆび」の構造は、現在の「私」の語り(〈1a〉と〈6〉)に、過去

の「私」を軸とした出来事（1b）（5）が嵌入されており、物語言説上は現在／過去／現在という順序で進行する。重要なのは、過去の出来事の回想・語りが、テキスト結末部の「私」に作用していく配置となっている点である。すでに先行研究では、井上明芳が「現在↓過去↓現在という過去回想形式は、物理的な時間の推移によって整理すれば、「祖母」の死を迎えた過去が在って、その後、一人で旅行に行っている「私」の現在があるということになる」と論じ、回想を終えた（6）の「私」を重視している。この指摘は妥当だが、本稿では過去における時間軸が複数だったことにも注目しておきたい。

（1b）では、「私と妹が幼い頃」の家族の記憶がたどられる。さまざま出来事の舞台となった「生まれ育った家の小さなテーブル」を、「私」は「家族の象徴」と意味づけつつ、「生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所」だと説明している。一方で、（2）には「妹が産まれるまでは両親が共働きですつとあずけられていたから、どうしようもないほどおばあちゃん子になってしまった私」という一節がみられる。つまり、家族が「小さなテーブル」を囲むようになったのは妹の誕生以後のことであり、その時から「私」は、共に過ごす家族が祖母から父・母・妹へと変わったことになる。以上を整理すると、次のようになる。

- A 「過去1」、「私」が祖母に育てられていた時期（両親は共働き）……（2）の一部
- B 「過去2」、妹の誕生後、家族四人で「小さなテーブル」を囲んでいた時期……（1b）の一部
- C 「過去3」、父がアロエ廃棄を話題にした夕方／祖母の死／「私」の転職の決意まで……（1b）（5）
- D 「現在」、ひとり旅にでた「私」が、山の中でアロエを目にする（語りの現在）……（1a）（6）

つまり、先行研究において過去として一括されてきた時間軸Cには、「私」にとつての祖母との距離を大きく異にするA/Bという時間軸が挿入されていたのだ。「みどりのゆび」というテキストにとつて、家族を背景とした「私」と祖母（の関係）が重要な意味をもつ以上、この確認は必須である。

第二に、一人称回想形式を採る「みどりのゆび」というテキストにおいて、どのような話題・モチーフが現在の語る「私」によつて選択されていたのか、検討しておく。

前項で明らかにしたように、テキストの冒頭部／結末部に配置された現在の時間軸D（〈1a〉・〈6〉）においては、本来、「私」は妹と一緒に旅をする予定だった。それが妹の夫の体調不良によつて妹が急に来られなくなり、その結果、「私」は「ひとりで旅をすること」になったのだ。このようにして一人となった状況下において、「私」はアロエを目にし、特別な時間を過ごすことになるだろう。

類似した状況は、〈4〉で祖母が「私」にアロエを助けるよう依頼する場面にもみられる。この春、すでに祖母はほとんど意識がなく、「ほとんどしゃべれなかった」という。にもかかわらず、見舞いに行った「私」が「祖母の手を握っていた」時、例外的に祖母は「私」に語りかけ、四つの直接話法によつて一貫したメッセージを伝え、また「眠った」。しかも、この直後には「看病の交代」で母と妹がやってくるのだから、ここには二つの例外が重なっている。ほとんどしゃべれない状態にある祖母が、「私」だけがいる時にしゃべったのだ。

病室で祖母が「私」だけに語る場面は、〈3〉にもある。祖母が「めずらしく起きていた」という例外的な状況において、祖母は「私」に「植物の仕事」を勧め、シクラメンと「友達」になったことを語っていた。

そもそも、祖母に入院を余儀なくさせた子宮癌(2)が「私」に伝えられたのは、アロエを処分することが父によって話題にされていた「いつもの夕方」であった。ここでも、「いつもの夕方」という日常的な状況に対比されることで、非日常的な出来事である祖母の病氣（の情報）が際立つよう語られていた。

してみれば、「みどりのゆび」において「私」が選択的に語っていたのは、いずれもいつもとは異なる例外的な状況において、祖母と植物（アロエ）とが関わる話題・モチーフだったのだ。また、その時、そこで、祖母や植物と向きあうのは、「私」一人であった。しかも、そうした話題・モチーフは、「いつも」や「毎日」といった表現在代表される恒常的な日々と対比的に語られることによって、例外性が際立たせられてもいた。

第三に、「みどりのゆび」における登場人物の書き方を、情報（量）の管理コントロールという観点から検討しておく。

語り手兼主人公である「私」については、随時その内面や記憶が書かれる。それに対して、「私」に多大な影響を与え、人と植物を媒介する重要な人物である祖母が内的焦点化されることはない。祖母についての情報は、「私」の視座から焦点化ゼロで書かれるか、祖母による直接話法によって示される（祖母の子宮癌を告げる母の台詞と、「私」による祖母との受けこたえの台詞二つ、計三例をのぞき、直接話法は祖母にのみ用いられる）。このことによって、祖母に関する情報はテキストに多いものの、その本心は空所ブランクとされる。したがって、祖母が「私」を後継者とみなし、「私」が祖母を慕うという二人の関係は、「私」がそのように感じていたものとして書かれていく。時間軸Aにも関わるエピソードとして、〈2〉には次の場面がある。

祖母の死は私にとって耐え難かった。淋しかった私が足をくっつけて寝た祖母。私の心に何か小さな影がさ

すと、本人よりもはやく気づいて私の好物のさつまいもの天ぷらを作ってくれた祖母。祖母の関心が日に日にこの世から、私から離れて行く。打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた。(一四頁)

ここでは、幼き日の「私」を心身両面から理解し、支えてくれた存在として、祖母が書かれている。ただし、正確に言えば、祖母が心の「小さな影」を察して「好物」を作ってくれたと「私」には感じられた、ということとどまる。それでも／それゆえ、「祖母の関心」を確かなものにしようとする「私」は、祖母が確実に愛していた「植物たち」と自身の境遇を「似ていた」と重ねて語るることによって、祖母からの愛を過去遡及的に既成事実化しようとしていく。一見、親密にみえる祖母と「私」の関係は、その実、非対称的なのである。

第四に祖母から「私」へのメッセージ「遺言」も検討しておく。これこそが、(植物を介して)祖母と「私」の関係を特別なものとして結びつけ、「みどりのゆび」のプロットの主線を形成する、テキストの急所でもある。ただし、祖母自身が明確に「遺言」として「私」に何かを語ったことはない(5)においてバーテンダーから花屋への転職の決意を父に語る際、父から店を譲り受けるための説得材料として、「私」が「祖母の遺言」という表現を用いたというニュアンスが強い)。

(3)には、祖母が「私」に転職を促す場面が書かれている。家族が「かわるがわるお見舞い」に行く日々の中、祖母が「めずらしく起きていた」時に、次の会話がある。

「ねえ、昔はシクラメンが嫌いだったのよ。」

祖母は言った。

「よくそう言っていたよねえ、でも、私もあんまり好きじゃない。なんだか湿っている感じがして」

「あなたは植物のことがよくわかるね、おばあちゃん、思うの。あなたは植物の仕事が合ってるわよ。ホステスはおやめなさい。」(二四～一五頁)

この場面において、祖母が「私」に「植物の仕事」を勧めているのは確かだが、「あなたは植物のことがよくわかるね」と判断した材料は、「なんだか湿っている感じ」という感覚に即して、「私」がシクラメンを「あんまり好きじゃない」と言ったことしかない。また、祖母が「私」に転職を勧めた理由の一つとして、次に引くように、「私」の現職が適していないと考えていたこともあったようだ。

私水商売で身をたてているのを祖母はいつも反対していた。ただし私はホステスではなく、父の経営しているバーのバーテンダーだったのだが、いくら説明しても祖母にとっては同じことのようなだった。(一五頁)

ここで注目しておきたいのは、祖母が「私」の(おそらくは)度重なる「説明」に耳を傾けることなく、「水商売」という思いこみを終始変えなかったことである。このことから考えれば、祖母が(家族の中でもとりわけ)「私」の話をよく聞き、関心をよせる理解者であった、とはおよそ言えない。それでも「私」は、「おばあち

やんがそう言うなら、考えてみる」と直接話法で応じており、「私」から祖母への信頼は揺らぐことはない。ならば、祖母のメッセージは、いついどのようにして遺言と化するのか。鍵となるのは、次の台詞である。

「[略] はじめは〔シクラメンを〕陰気な花だなあ、と思ったの。〔略〕でも、ここに来て、時間ができたら少し違って見えてきたのよ。あの茎は水を吸い上げるためにあるのね。水をやってから、あの花たちが一所懸命に首をあげてお日さまにあたろうとしているのを見ると、ああ、あなたたち生きてるんだねえ、って退屈しないのよ。時間ができるとってそういうことね。もうシクラメンとは友達になったから、あっちではシクラメンも育てられる自信がついたわ。」(一五〇―一六頁)

右の言葉を聞いた「私」は、「そうやって今まで嫌いだった全てを好きになってしまっただけから初めて行くところがあるのだろう、と思うのは切なかった」と感じる。口にはされる言葉と心中思惟という非対称的なやりとりではあるが、「あっち」と「初めて行くところ」は、いずれも祖母の死後の世界を指しており、この時、祖母も「私」も、近い将来における祖母の死を前提としている。つまり、祖母のメッセージは、祖母が自身の死を予言的に語り、「私」が祖母の死を(一応は)肯うことによって「遺言」になつたのだ。

また、祖母から「私」へのメッセージとして、「みどりのゆび」全体のプロットにも関わる、(4)におけるアロエを切らないように依頼する場面も検討しておく。この時、祖母は「意識がほとんどなくなつた」状態である。にももかかわらず、祖母は「私」だけがいる時、「ふいに」次のように言ったのだ。

「アロエが、切らないで、つて言ってるの。」

細い、途切れ途切れの声で、はじめは何のことかわからなかった。

「アロエが、駐車場の、陰で、車に、ふまれて、痛いって。」

「にきびも傷も、なおすから、花も咲かせるから、切らないであげて。」

祖母は夢うつつでまるで誰かの言葉を聞き取るかのように、少しずつ、そう言った。(一六〇―一七頁)

当初、意味として理解するのが困難な「細い、途切れ途切れの声」から、「私」はメッセージを聞きとっているが、その際の祖母の様子は「夢うつつ」に見えている。だから、右のメッセージは祖母の直接話法であるにもかかわらず、「私」は「誰かの言葉」と捉えざるを得ない。しかも、「ぞうつとした」、「なんで私だけがこれ聞いてしまったんだろう？」と思った」というのだから、驚きが大きいばかりで、受けとめきれずにいる。

この依頼に対する「私」行動の順序は、注目に値する。というのも、依頼を受けた「私」は、アロエの植え替え前に、祖母の部屋に向かったのだから。この順序は、右に引用した発話主体が曖昧なメッセージを、「誰かの言葉」ではなく祖母の意志によるものと、語る「私」が意味づけ、直す行為だと伝える。その帰結として、「私」は祖母の部屋において、祖母と植物（の意志）を明確に重ねて受けとめるという経験をするので。こうして「私」は、意識が朦朧とした状態で発されたメッセージを、祖母からの依頼へと読み替え、終えてからアロエを植え替えるのだ。祖母の依頼を果たしたことで、ここまでの操作は、語る「私」において正解となる。

このような一連の言動を通じて、祖母との相互理解に基づく「みどりのゆび」の継承者にふさわしい存在として、語る現在の「私」は、語られる過去の「私」を積極的に語り・演出していたのである。

以上、本節で検討してきた「みどりのゆび」というテキストの特徴をまとめておく。

確かに、先行研究で重ねて論及されてきたように、一人称回想体によって現在の「私」が参照するのは祖母（の死）であり、その媒介が植物（アロエ）であったことは間違いない。しかし、「私」は「遺言」を手がかりに祖母の死を乗りこえ、成長するという単線的な物語を生きたのではなかった。テキストには、過去の物語られる「私」が体験したさまざまな出来事や感情を仮想上に対置するかたちで、現在の語る「私」が選択した祖母と植物（アロエ）を主線としたエピソード群が、作為的な時間操作・語りによって構成されていたのだ。

Ⅲ アロエをめぐるプロット／祖母と「私」の関係性

前節までのテキストの基礎的な検討をふまえて、本節ではアロエを軸とした「みどりのゆび」のプロットについて検討していく。「みどりのゆび」において植物の代表として「私」と関わるアロエは、〈1b〉で話題にされた後、〈4〜6〉においては中心的なモチーフとされていく。

〈1b〉では、「生まれ育った家の小さなテーブルを父と妹と私」が「囲んでいた」という「いつもの夕方」に、近所迷惑なることを懸念した父がアロエを処分してよいかと問いかける。「私と妹」は「植え替えが面倒臭くて聞かないふり」をしているうちに母が帰宅し、祖母が末期の子宮癌だと告げる。そのことで、「うちの家族は

アロエがどうのこうの言っている場合ではなくってしまった」。結果からいえば、祖母が自らの病んだ身体を賭すことによって、(母を介して)アロエの処分を一時的に中断させたことになる。逆に言えば、ここで提示されたアロエのゆくえは、「みどりのゆび」において解かれるべき謎としてテキストに宙吊りにされる。

〈4〉における、入院中の祖母がアロエを処分しないよう「私」だけに依頼する、前節の最後に引用した場面につづく次の祖母の台詞は、「みどりのゆび」のプロット展開に大きく関わる。

「それでね、おばあちゃんはあんたにはわかると思うの、そういう感性がね。植物ってそういうものなの。

ひとりのアロエを助けたら、これから、いろんなね、場所だね、見るどんなアロエもみんなあんたのことを好きになるのよ。植物は仲間同士でつながっているの。」(一七頁)

正確に言えば、ここでは祖母がアロエを切らないよう依頼しているのではなく、アロエが「切らないで」と求めていたことを祖母が代弁している。祖母がアロエ(植物)とコミュニケーションをとっていたことは、自明の前提とされているのだ。しかも、祖母は「そういう感性」が「私」には「わかる」はずだとも考え、そのように発言している(これは、祖母が「私」に「植物の仕事」を勧めた根拠でもあるだろう)。

病院を出て、祖母の部屋によってから帰宅した「私」は、すぐに「アロエをていねいに土から掘り出し」、「なんとか運んで、庭の昼間陽当たりがいいところ」へと植え替えるが、その後の様子は次のように書かれる。

春の大きな月のおぼろな明かりに照らされて、植え替えの泥にまみれたアロエは生命の力を発散していた。擬人化して「ありがとう」と言っていると言いたいところだったがそんなものではなくて、ただひたすらに生きてあちこちに根をはり、葉を広げていた。それにまた私ははげまされる思いがした。(一八～一九頁)

この段階で「私」は、アロエから「生命の力」を感じとり「はげまされる思い」を抱いてはいるものの、アロエの「擬人化」に想到しながら「そんなものではなく」と思い直している。つまり、この段階では、「私」とアロエ(植物)との間に、祖母と植物のようなコミュニケーションは成立していない。

それでも、祖母死後の時間軸Cである(5)において、「私」が「昼間は専門学校に通い、花屋を開くための勉強をすることにした」のは、「祖母の最後の言葉」にくわえ、右の体験も大きく関わっているだろう。というのも、「私」は次のような確信を抱くに至っているのだから。

家族のテーブルで無邪気に過ごしながら、アロエの生命をぞんざいに扱える幼いかわいい私にはもういくら振り向いても戻れなかった。(一九～二〇頁)

多くの先行研究が論及してきた「私」の変化は、ここに決定的となる。ただし、ここで「私」の過去／現在を決定的に分けるのが(祖母の死ではなく)「アロエの生命」(植物)であった点には、その表現まで含めて注意が必要である。裏を返せば、(少なくとも、右の一節を根拠にした)「祖母の死を乗り越えた「私」の成長」とい

う「みどりのゆび」理解は、テキスト性をうまくすくいあげられておらず、飛躍をはらんでいる。

本稿では、こうした「私」の変化を成長へと短絡することなく、「家族の象徴」と意味づけていた「小さなテール」に戻れないと自覚した「私」が、どのように書かれていくのか、テキストに即して考察していく。その手がかりは、「みどりのゆび」の結末にして〈1a〉のつづきである〈6〉において、やはりアロエとともに書かれる。一人旅に出た「私」が宿に向かう「山の中」で感じた「何かの気配」は、「幽霊でもいいから会いたかった」という祖母ではなく、「ぞっとするほどたくさん、ジャングルのように茂っているアロエ」だった。

アロエは陽を受けて、私に何か言いたそうにしているように思えた。とげとげした肉厚の葉を冬の空に高く広げ、重なりあい、いくつもの赤くごつごつした花を奇妙に咲かせて、生きている喜びを伝えようとしていた。アロエの愛情に包まれて、私は陽の光の中であたためられているような気がした。(二〇～二二頁)

まずは、「アロエ」に対する「私」の受けとめ方の落差を確認しておこう。

「みどりのゆび」においてはじめてアロエが話題になった〈1b〉には、「父も母も私も、妹が三百円で買ってきて庭に植えるところがないからと玄関脇に植えたアロエのことなど、すっかり忘れていた」と書かれており、かつての「私」はアロエに無関心だった(ましてや「アロエの生命」など、意識していない)。それでいて、その近所迷惑にもなりかねない育ちぶりや花の特徴は、「私」の記憶に留まっていたようである。

しかし、水もろくにやらず、陽当たりもさほどよくなかったのに、アロエは育っていった。育ちすぎて、気づいたら木のようになり、道に大きくはみだし、さらに気色悪い形をした真つ赤な花まで咲かせていた。
(一〇頁)

もとより同一のアロエではないが、かつて「気色悪い形をした真つ赤な花」と生理的嫌悪感に即して表現していたアロエの花について、現在の「私」は「赤くごつごつした花を奇妙に咲かせて、生きている喜びを伝えようとしている」と、「ごつごつ」、「奇妙」といった修辭は用いつつ、しかしそれらも生命力に連なるものとして肯定的に表現している。ただし、この段階でも「私」が、祖母のようなアロエとのコミュニケーションをしているからとは言えない。アロエの「生きている喜び」を、「私」は「伝えようとしている」ものとして受容しているからだ。それでも、「私」が段階的に植物とのコミュニケーションに近づいていることは間違いない。

そうか、こうやってつながりができていくのか、もうアロエは私にとってどこでも見る度にあたたかいものや優しいものにつながっていく。どのアロエも私には等しくあの夜に植え替えたアロエの友達だ。人間と変わらずに縁ができていく、こうしていろいろな植物と私はお互いに見つめあっているのだ、そう思った。祖母から私が受け継いだものは、たとえ根拠のない迷信のようなものであっても確かに役立ついくその力、よく言われる「みどりのゆび」なのだった。この才能があれば植物はその生命をこの腕の中で**ぞんぶんに輝かせることができるはずだった**。こうやってこの仕事についていた人々と私もまた、つながっていくのだ。(二二)

テキスト唯一の「みどりのゆび」という表現や、〈6〉結末というテキスト上の配置も含め、右の一節は決定的に重要な場面である。ただし、これをもって「私が」祖母から「みどりのゆび」を受けついで、あるいは祖母のおかげで「みどりのゆび」という能力を自覚し、手に入れた、と理解するのは早計である。

もちろん、「そうか」の一言に集約されるように、右の場面で「私」が病床の祖母から送られたメッセージ〈「ひとりのアロエを助けたら、これから、いろんなね、場所だね、見るどんなアロエもみんなあんだのことを好きになるのよ」〉を、感覚→身体を通じて実感したことは間違いない。すでに「私」は、自宅のアロエを「助け」ており、したがって山中で目にしたアロエも「私」のことを「好きになる」はずで、事実、「私」もアロエを「友達」と表現している。しかも、前後して「私」は「みどりのゆび」をそれと想到→自覚しつつあるのだから、「あの夜」の「私」のアロエの植え替えの仕方は、何かしらすぐれていたということだろう。

ただし、右の引用箇所では、「できていく」、「つながっていく」、「見つめあっていく」、「つながっていく」と動作の継続を示す表現が多用され、また「輝かせることができるはず」とあるように、それらの成就がいずれ果たされていくにせよ、まだ「私」は「みどりのゆび」の持ち主として自らを証だててはいない。

この時点で「私」に足りていなかったのは、アロエを助けた後に、再びアロエに「みどりのゆび」で触れることである。そのことは、右の引用箇所につづく「みどりのゆび」結末部で明らかになる。

昔はそのとげとげを憎らしく思い、日焼けの時にしか使わないのにとぞんざいに扱ってきたその葉に、私は手袋をはずしてそっと触れた。若い緑色はまるで宝石のように輝き、葉は絹のようになめらかにひんやりとしていた。人と握手をしたあとのように元気を出して、私は山道を登っていった。(二二頁)

ここで、「私」ははじめて「その葉」に素手で触れる——「みどりのゆび」を実践したことになる。その後、「私」は「人と握手をしたあとのように元気」になったのだから、すでに植物（アロエ）と「友達」になっている。つまり、祖母の「遺言」が「私」の感覚―身体に血肉化されたといえる。このテクストの結末部―最終ステップにおいて、「私」と植物（アロエ）とのコミュニケーションは一段階深まったといえるだろう。

それでも、アロエの描写と「私」の変化はていねいに捉えておきたい——「私」が触れたアロエは、もともと、「宝石のように輝き、葉は絹のようになめらかにひんやりとしていた」のであり、「元気」にしてもアロエからもたらされたものではなく、アロエの姿を見た「私」が、自ら「元気を出し」と書かれている。そうである以上、ここに、祖母が実演し、そして「私」に託した、非現実的で不思議な事態は生じていない。

しかし、「私」に変化がなかったわけではない。(5)において過去の自分を相対化していたように、ここでも「私」は、「昔は」と過去を相対化し、現在の「私」自身を意味づけている。ここでの意味づけの内実とは、祖母の遺言を言葉の上だけでなく、感覚―身体を通じて理解し、植物（アロエ）と「友達」となることである。これを別言すれば、祖母の「遺言」をそれとして、実践したことが同義で、そうである以上、「私」は祖母の死を受けいれていることになる。「遺言」とは、死にゆく者が生きている者に遺す言葉なのだから。

こうした確認が必要なのは、「私」が祖母の死を受けいれるには現在まで、という長い喪の時間が必要だったからだ。旅先で「私」が「遺言」を受けとめたということは、裏返せば、祖母の死を経て花屋を目指していた時期も含め、〈5〉の時点で「私」はまだ祖母の死を受けとめきれていなかったことになる。それゆえ、「みどりのゆび」には〈6〉が必要で、それが果たされたがゆえに「私」はこのテキストを語り得ているのだ。

IV 祖母の部屋／もう一つの世界

ここまで、「みどりのゆび」をテキストという観点から分析的に読解してきた。

祖母死後の時間軸にしてテキスト終盤部となる〈5〉・〈6〉において、「私」はどのような地点にたどりついたのだろうか。祖母から「あなたにはわかると思うの」と言われた「私」は、実際に祖母の勧めにしたがって花屋への転職を目指し、ひとり旅の山中で目にしたアロエに触れて「元氣を出し」たところまで、テキストには書かれていた。それでも、「私」が祖母のような植物とのコミュニケーションを運用できる「みどりのゆび」の持ち主かどうか、その能力の有無はテキストでは明らかにされていない。少なくとも、「私」が植物をチト（モリス・ドリユオン『みどりのゆび』）のように不可思議なたちで育てたことは、テキストに書かれていない（「私」のそれらしい行動は、祖母の依頼をうけて自宅のアロエを植え替えたことのみである）。

前節でのアロエを軸としたプロット分析をふまえると、「みどりのゆび」について残された問いは、少なくとも当時は半信半疑であっただろう祖母のメッセージ「遺言」を、なぜ「私」は信じていることができ、「みどりの

ゆび」 という能力の確証ももてないままに、「きついところもたくさんある」転職をしてがんばっているのだろうか、というものである（テキストに書かれた限りでは、「私」はまだ花屋になつてはいない）。

この問いを検討しようとする際には、〈5〉に「突然の転職はやはりきついところもたくさんあるが、根拠があればがんばれるように思えて、先に進むことにした」という一文が改めて注目される。ならば、感覚的な表現が多用された「みどりのゆび」において、ひときわ異彩を放つ「根拠」の内実はどのようなものだろうか。先の一節以降、〈5〉に書かれた「私」から「離れなかったもの」としては、転職を勧めた「祖母の最後の言葉」と、それから「あの夜の祖母の部屋」がある。ここでは後者、次に引く〈5〉掉尾に注目したい。

私はいつか死ぬ時、ひとりでも、小さな部屋でもいいから、あんな清潔な部屋を遺したいと思った。愛された植物たちが存在する、あの夜の祖母の部屋が私の頭を離れなかった。（二〇頁）

このように指示語「指示対象を遡行的にたどっていくと、〈4〉で自宅のアロエを植え替える前に「私」がたよった祖母の部屋へとたどりつく。その部屋（の書き方）の検討に先立ち、入院した祖母のお見舞いを通して「私」に育まれていった死生観を、次に引く〈2〉の一節から確認しておきたい。

病院というところは、玄関から入った瞬間には居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたいと思うが、しばらくいると慣れる。そして、外に出ると、すべてが強烈すぎる感じになる。交差点でいつせいに押し寄せてく

る車たちや、永久に生きると思いこんでいる人々の声の大きさを、色の洪水に驚く。そして家につくころには慣れる。行ったり来たりしていると自分が不思議な地点にいることに気づく。(一二一～一二三頁)

祖母の入院後、頻繁にお見舞いに行くようになった「私」が、病院の内外を往還して、双方に慣れながらたどりついた「不思議な地点」。ここではまだその内実は語られないが、「私」が二つの世界を対極的なものと捉えつつ、双方に「慣れる」ことができる人物だということまでは確認できる。右の引用箇所につづいて、「私」はオルフェウスの神話にふれた上で、右に言う二つの世界を「生／死」という言葉で意味づけていく。

生命の発散する濃い匂いはもう、あちらの世界ではただただ押し付けがましい毒々しい尖った匂いに変わってしまふ。その反対に死の匂いを人は忌み嫌う。太陽の下に出ると、弱っている人が発散する死の匂いは雪みたいにすぐに溶けてしまふが、そのかすかな匂いは麝香みたいに、遠くからでもかきわけることができる。弱った同胞を人は恐怖する。自分達の生活が終わってしまうように錯覚する。(一二三頁)

これが「不思議な地点」の内実であるはずで、「私」は「生（生命）／死」について、「かすか」でも「遠くから」でも匂いによって嗅ぎ分けられるようになっていく。神話のオルフェウスとは異なり、祖母を病院に見舞う日々を過ごすことによって、「私」は「生（生命）」の世界／「死」の世界を往還できるようになったのだ。しかも、右の引用箇所につづいては、「弱った同胞を人は恐怖する。自分達の生活が終わってしまうように錯覚する。

どちらも慣れてしまえば同じことだというのに」という一節が置かれ、つまり「私」は、「生（生命）／死」を対極の世界として分節しつつも「同じ」だと実感している。これらを総合すると、第一段階で「私」は「生（生命）／死」を二つに分節しながらも「同じ」だと捉え、第二段階では、それら生死の差を問題にするか否かで世界を二つに分節し、前者に「自分達」つまりは一般の人々を、後者に自分を配置していく。

あわせて気になるのは、右の二つにわけて引用した二連のパラグラフが、一貫して現在形の文末表現で書かれていることである。祖母の入院以降の時間軸をモチーフとした（2）は、語りの現在からは明らかに過去であるにもかかわらず、である。こうした様相は、「慣れる」という時間の蓄積と幅を示す文末表現と捉えることも可能だが、「生（生命）／死」の差異で世界を分けられないという、語る現在の「私」の死生観でもある。事実、以下に検証していくように、「私」は祖母の死を、いわゆる死とは異なるかたちで捉えているのだから。

このようにユニークな「私」の世界の捉え方をふまえた上で、当初の問題である、「私」が死後に「遺したい」と思った祖母の部屋がどのように書かれていたのか、ていねいに読んでみよう。次に該当箇所を引く。

私は無言で祖母の部屋に行き、遅くなってごめん、といいながら植物たちに水をやった。電気をつけたら部屋にちりばめられている祖母のささやかな人生が蛍光灯の真つ白い光に浮かび上がった。ふかふかの座ぶとん、クリスタルの小さな花瓶。筆と硯、きちんとたたまれた白いエプロン。海外旅行で買ってきた異国情緒あふるるおみやげが並んだガラスケース、眼鏡、文庫本、小さな金の時計。古い紙のような、祖母の匂い。私はずらくなって電気を消した。（二七―一八頁）

植物を「植物たち」と擬人法で表現し、話しかけていることから、少なくとも「私」が植物と対等なコミュニケーションをとろうとしていることは明らかである。つづいて「私」は、「祖母のささやかな人生」を構成する品々を、視界に入った順に列挙法⁽²⁹⁾によってあげられていく。その直後、「私」は「つらくなって電気を消し」ているが、それは祖母の「死の匂い」ゆえであるだろう。ただし、「私」は近づきつつある祖母の死を悲しむ死生観とは異なる、生死を問題にしない世界に自身を位置づけていたはずだ。そう考えた時、右の引用箇所が、電気をつけてから消すまでを描く場面であったことの意味が明らかになる。「私」が目にした「蛍光灯の真っ白い光」が照らす光景は、生死を問題にする世界だったのだ。

ならば、電気が消えた部屋はどのように変じるといえるのか。もちろん、祖母の部屋が物理的に変わることはないものの、「私」が「ガラスの向こうには植物たちが息づいていた」ことに気づくと、世界は変わってみえる。

外の明かりにふちどられるように、生き生きと緑色だった。さっきやった水の滴がきらきら輝いていた。暗い畳にじっと座ってそれを見ていたら、なんだか少しずつ楽になってきた。これはひとりの人が生きてきたあたりまえの足跡で、悲しくも苦しくもない、どちらかといえは幸せなものなのだという気がしてきた。悲しみににごった目で見た第一印象で決めるものではないと植物が教えてくれたような気がした。ただ陽を求め、水を求め、愛を求めて生きていくだけの美しい生物たちが。(一八頁)

部屋の光景だけでなく、祖母の人生すら「悲しくも苦しくもない、どちらかといえば幸せないもの」へと、「私」の主観のなかで大きく意味を変じていく。つまりは、生死を問題としない世界を、この時「こころ」で、「私」は実感している（蛍光灯下で目にした祖母の部屋から感じたものは、誤った「第一印象」に過ぎなかったのだ）。そして、その導き手となったのは「植物」＝「ただ太陽を求め、水を求め、愛を求めて生きているだけの美しい生物たち」であった。それを、社会的な意味から解き放たれた自然それ自体の生命力、と換言すれば、生物単体の生死を問題にすることなく「生物たち」というネットワークがひろがる世界——つまりは、（人間界における）生死を問題としない世界と重なる。こうした視座からすれば、人間界における祖母の死がことさら問題になることはなく、それは生命の営みの一端を担うごく自然な出来事だということになる。かつて、〈3〉において祖母が「あつちでシクラメンも育てられる自信がついたわ」と言ったのは、文字通りの意味だったのだ。

とはいえ、右の引用箇所における「気がしてきた」、「気がした」という文末表現がよく示すように、「私」にとって生死を問題としない世界は、きわめて主観的・感覚的なものとして実感され、そのようなものとして表現されている。ただしそれは、不確かさゆえの否定的なニュアンスをともなっていない。それもそのはずで、そもそも、「私」が「突然の転職」による「きついいところ」をがんばれている「根拠」は、祖母の「遺言」と祖母が遺した部屋だったのだから。あるいは、改めて〈6〉から次の一節を確認することもできるだろう。

祖母から私が受け継いだものは、たとえ根拠のない迷信のようなものであっても確かに役立っていくその力、よく言われる「みどりのゆび」なのだった。（二二頁）

すでに論じたように、「みどりのゆび」という能力が「私」に宿っているのか否かは空所^{フランク}とされたままだが、「私」が「根拠のない迷信のようなものであっても確かに役立っていく」ものを、祖母と植物から教えられた気がして、感覚的にそれを受けとめ、生死を問題としない世界を生きはじめていることは間違いない。「みどりのゆび」というテキストに書かれた「私」の変化とは、このような世界（視座）の転換を最大のものとす⁽³⁰⁾る。

したがって、「いつか死ぬ時、ひとりでも、小さな部屋でもいいから、あんな清潔な部屋を遣したい」という「私」の願望は、生死を問題とする世界での死をそのようなものとして前提にした上で、植物を含めた「生物たち」と共生する、生死を問題としない世界で生きていく意志表明でもあったはずだ。ここで「清潔」とは、生死を問題とする世界におけるさまざまな意味（汚れ）がないことを表すはずで、そうしたことを集約し象徴しながらテキスト結末において「私」は、アロエに励まされるようにして「山道を登っていった」。

《注》

- (1) 拙論「私・無意識・小説(家)——吉本ばなな／金原ひとみ——」(『神奈川大学評論』二〇一九・七) 参照。
- (2) 無署名「創るアングル 作家吉本ばなな／厳しい鍛錬、短編に実る」(『日本経済新聞』二〇〇〇・一〇・八、二七面)。
- (3) 収録順に「みどりのゆび」、「ポート」、「西日」、「黒いあげは」、「田所さん」、「小さな魚」、「ミイラ」、「明るい夕方」、「本心」、「花と風と」、「おやじの味」、「サウンド・オブ・サイレンス」、「いいかげん」の二三編が収められている。
- (4) 鶴「著者来店」吉本ばなな自選集「吉本ばななさん／ささやかで大切なもの描く」(『読売新聞』二〇〇一・一・一四、一三三面)。

- (5) 「吉本はななロンクインタビュー 短篇小説のよるこび」(『文学界』二〇〇〇・一一)、三〇六頁。なお、大井浩一「『体は全部知っている』著者吉本はななさん 魂の抜けたような人がいる」(『毎日新聞』二〇〇〇・一〇・一)においても、「『文藝春秋』というのをすごく意識して書いた。(読んだ人が)全然何だか分からん、娘さんの言うことは、とまらないように」。もちろん、仕掛けは考えた。「こうセッティングすればオヤジ世代の心もゲットできると」(笑い)(一一面)というコメントが紹介されている。
- (6) 注(5)に同じ、三〇四頁。なお、著者インタビュー「忘れていた記憶や、押し殺していた感情を解放させてくれる13の短編集。」(『man』二〇〇〇・一一・三)には「匂いや味、季節の変わり目の急に冷たくなった風だとか…。何かを肉体で感じることで、莫大な記憶や深層心理が呼び覚まされることってありますよね。そういう、体の声に敏感でいることは、頭であれこれ模索するよりずっと意味のあることだと日々実感しているんです」(一三五頁)という発言もみられる。
- (7) 長編三部作『王国 その1 アンドロメダ・ハイツ』(新潮社、二〇〇二)、『王国 その2 痛み、失われたものの影、そして魔法』(新潮社、二〇〇四)、『王国 その3 ひみつの花園』(新潮社、二〇〇五)に、『アナザー・ワールド 王国その4』(新潮社、二〇一〇)をくわえたシリーズ。
- (8) 注(5)において、「『体は全部知っている』にも、今まで言葉にされなかったような微妙な身体感覚の描写が随所にありますね」というインタビューの問いかけに、吉本は「思想的なことを書くのが得意な人、恋愛を書くのが得意な人は他にいますか、とも私は漠然とした、自然と自分との関係が得意ジャンルなんです。ここは居心地が悪いとか、海辺にいますか、という気分になる、といった漠然とした身体感覚や、記憶に関して考えることを文にするのはわりとうまい方だと思うので、頑張っていきたいと思います。」(三一五頁)と応じている。
- (9) 光野桃「『すべての生き物は死ぬまで生き抜く』という真理の清冽さ 吉本はなな『体は全部知っている』」(『文藝春秋』二〇〇〇・一二)、三九四頁。
- (10) 注(9)に同じ、三九五頁。
- (11) 長瀬安浩「肉体が囁きかける『感覚』を取り戻そう／女性だけの特権にしておくのはつまらない 吉本はなな『体は全部知っている』」(『週刊朝日』二〇〇〇・一二・八)、一二六頁。

- (12) 安田正典「みどりのゆびの指さす方角——吉本ばななの小説を読む」(『高校国語教育』二〇〇三・五、一三頁。なお、石原千秋「教室で教えられること」(『日本語学』二〇〇三・六)には、「一人の女性が植物であるアロエとの交流(?)によって祖母の死を乗り越える物語」(六五―六六頁)という要約があり、差異/同一性がみられる。
- (13) 注(12)に同じ、一六頁。
- (14) 神田富士男「癒された後に——吉本ばなな「みどりのゆび」を読む」(『月刊国語教育』二〇〇四・三)、一〇三頁。
- (15) 注(14)に同じ、一〇三頁。
- (16) 青嶋康文「孤から個へ——吉本ばなな「みどりのゆび」を読む」(『月刊国語教育』二〇〇四・七、五四頁)。
- (17) 注(16)に同じ、五五頁。
- (18) もちづきみつこ「吉本ばなな「みどりのゆび」について」(『静岡近代文学』二〇〇九・一二)、五〇頁。同論には、テキストの注目点や解釈に関して、大きな示唆を受けた。
- (19) 佐々木義登「吉本ばなな「みどりのゆび」の語りを読む——揺さぶられる〈わたしのなかの他者〉——」(『日本文学』二〇一一・八)、一五頁。
- (20) 注(19)に同じ、二二頁。
- (21) 井上明芳「教材としての吉本ばなな「みどりのゆび」の構造分析——経験される物語——」(『國學院大學教育学研究室紀要』二〇一七・二)、七三頁、八二頁。
- (22) 長谷川弘基「マニエリスムの歪み——『体は全部知っている』(現代女性作家読本刊行会編『現代女性作家読本⑬よしもとばなな』鼎書房、二〇一一)、七四頁。
- (23) 拙著『太宰治の小説表現』(パブリック・ブレイン、二〇二二)ほか参照。
- (24) 注(21)において井上は、「この明確な「感じ」が過去回想に入るきっかけ(七四頁)だと指摘している。
- (25) 注(21)に同じ、七二頁。

- (26) 小倉智史「教材研究・よしもとばなな『みどりの指』——一人称視点「私」からの描写の整理——」(『宇大国語論究』二〇〇六・三)には、「作品中の祖母、あるいは植物たちは、あくまでも「私」の視点から切り取られている」(三三頁)という指摘がある。
- (27) 祖母の病気が子宮癌であることには、(性的な表徴よりもむしろ)再生産・生/死に関わる機能の病という意味が大きいと思われる。もとより、祖母は死を迎えるが、植物と友達になってつながり、「私」の記憶にも生きつづけていく。その意味で、生物学的な死を描くことは、対照的な世界を展開する要ともなっている。
- (28) モーリス・ドリュエオン／安藤次男訳『みどりのゆび(新版)』(岩波書店、二〇〇二)において、主人公のチトがもっている「みどりのおやゆび」は、それを認めたムスター・シユじいさんによれば「目には見えない」、「皮膚の下でおこる」、「かくされた才能とよばれている」もので、「(みどりのおやゆび)がこの種のひとつにさわると、種はどこにいても、たちどころに花が咲く」(五四頁)と説明されている。
- (29) 宮畑一範「列挙法(enumeration)」(瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明編『例解』現代レトリック事典』大修館書店、二〇二二)においては、「全体を構成する部分をいくつも挙げると全体に近づきます」「とくにこの「全体」が場所に関わる場合は、数の多さよりも至るところという意味に力点が移ることがある」(二三三頁)という指摘があり、この場面にもこうした効果がみられる。
- (30) したがって、先行研究で論及されてきたところの癒やしや批評性は、テキストに書かれてはいない。